

吉本 均著

『授業成立入門―教室にドラマを!』

(明治図書・教育新書5、一九八五年)

書評

山本 順彦

(本学講師)

本書は著者自身も「はじめに」において述べるように、教育や授業に関する「評論」や「学説」として著わされたのではない。子どもの無限の発達可能性にたいする全幅の信頼に裏打ちされた教師の積極的な働きかけをとおして彼らを能動的な発達と学習の主体へと形成するための「思想と技術」^{イデオロギイ}とを展開した書である。

著者は主体を育てる授業指導の前提としての子どもの見方(「子ども感」)について以下のように述べる。子どもたちを、「荒れる」子どもと「荒れない」子どもとが別個に存在しているといった二元的・固定的な見方によってとらえてはならない。すべての子どものなかに「荒れる」部分と「荒れない」部分とが共存しているのであり、たとえ「できない」子と言われる子どもであっても「できる」子になりたいという強く切実な願いや要求が彼らのうちには秘められているのである。したがって、教師は、そうした「子ども感」にたって子どもたちの「荒れない」部分や「できる」子になりたいという切実な願いにたいして「共感」し、「も

う一人の自分」になるための闘いへと子どもたちを励まし続けなければならぬ。そのための、授業における指導技術が今、まさに求められねばならないのである。

著者は、子どもを「できる」子にする、すなわち発達と学習の主体として形成していくための授業における指導の原点は教師と子どもとの間に「まなざしを共有して向かい合う」関係を成立させることにあるという。授業不成立が指摘され、それが教育界の重要関心事となっているような今日の教育状況のなかにあつてはこのことはより一層強調されなければならない。ところで、ここでいう「まなざし」とは、客体としての身体の一部である「眼」とは異なつて、精神が生きて訴えかける表現として、ときにはやさしく、ときには淋しく、ときには悲しみに満ちて働きかける「主体」精神の表情「なのである。だから、教師が「まなざし」で「語りかける」ということは「目」で、「顔」で「からだ全体」で「声に表情」をつけて、すなわち「精神としての身体」として子どもたちにたいする自らの切実な願いや要求を語りかけていくということにはほかならない。このように教師が子どもたちにたいして自らの願いや要求をこめて「まなざし」を向け語りかけるとき、その語りは子どもの「身(心)」^{からだ}に「かかり、子どももまた教師にたいして「まなざし」を向け返えし、「身体で応える」学習主体として起ち上がってくるのである。このことは、まさに授業成立の原点としての教師と子どもとの「応答的關係」成立の第一歩なのであると著者はいう。

著者は、こうした「まなざしを共有して向かい合う」という教

師と子どもとの応答的関係の原点成立を起点として、さらにその応答的関係の質的發展を促すための指導技術を展開する。

子どもたちを「身体で応える」主体、すなわち「まなざしを共有して対面する」主体、「うなずく」主体、「わからないを出す」主体、「接続語でからみ合う」主体といった段階（ステップ）を経て発達する学習主体として育てるために、授業のなかで子どもたちが示す発達の事実を刻々にねうちづける「指導的評価活動」が教師によって積極的になされなければならない。子どもたちが示す一見、「否定」的な事実のなかにも「肯定」的な側面を「発見」し、それを評価することで子どもたちの意欲を喚び起こし、彼らを自立する主体へと育てていかなばならない。

また、子どもたちが教科内容を習得する活動を組織するためにまず授業を実施する以前に教師は、子どもたちに「教えねばならないもの（教科内容）」を「教えたいもの（教材）」へと転化する「教材・教具・解釈づくり」をなすべきこと、「教えたいものを学びたいもの」に転化するために子どもたちの意見・発言の多様な対立・分化を予想した「発問づくり」に取り組みべきこと、またそうした発問の構成原則が述べられる。

そして、こうした「教材・教具・解釈づくり」、「発問づくり」によって形成された授業指導の構想にもとづきながら、教師は授業過程のまっただなかに立って「教育的タクト」を存分に発揮しつつ、すなわち「答から始め、答にからむ」ことで、子どもたちの「つまづきを拾って深める」ことで、またときには討議内容を「班（小集団）」におろして広げたり、「接続語でかかわり合い」

をつくることによって、子ども相互の応答的コミュニケーションを組織し続けていかなばならないと著者は力説する。こうした、自ら子どもに応答し、同時に子どもたちの応答的コミュニケーションを組織する教師の指導技術が十全に発揮され、駆使されることによってはじめ、子どもたちは「まなざしの共有」から「真理・真実の共有」へと至るまさに「呼応のドラマ」を展開していくことが可能になるのである。

総じて、本書は、子どもたちを真に自立させ、「まなざしの共有」によって「呼応のドラマ」を成立させるための真に実践に生きる優れた授業指導の技術論であるといえる。子どもたちに積極的に働きかけて彼らを身体ごと自立の主体として立ち上がらせるための教育技術がこれまでに、本書の著者、吉本均氏を置いて他に誰かによって主張されただろうか。子どもを動かして一見、彼らを自立させているかのように見せかけてはいるが、実のところ安易な「指示的教授」に終始して子どもを少しも主体化しない教育技術論が何の臆面もなく主張されたりする。また逆に、子どもの発達にたいする責任を全面的に放棄した、アナーキーとまで言っている程に無責任極まりない「自発性信仰」論が声高に叫ばれたりもする。そんななかにおいて吉本氏は、子どもたちの胸底に秘められた深い悲しみや発達への苦悩に共感しつつ働きかける「技術」としての「愛と要求」の教授学のより一層の発展のために、すぐれた知見を提出され続けておられる。子どもを真に自立の主体として育てあげる真の教育学を求め続けて止まぬ方々に一読をおすすめする。もし、氏の教授学に深く共感を覚える方あれば、

氏の一連の教授学的高著、『ドラマとしての授業の成立』、『授業の構想力』、『学校教授学の成立』（いずれも明治図書刊）等々も是非とも併せて読まれんことを。

推薦図書

一 野口芳宏著

『授業で鍛える』

（明治図書・教育新書13、一九八六年）

二 上田 薫著

『人間の生きている授業』

（黎明書房、一九八六年）

山 根 耕 平

（本学講師）

ここ二、三年、いわゆる「教育技術法則化運動」が、若い先生たちを中心にかなりの盛りあがりを見せているが、この「運動」は、美しく響きのよい字句に飾られてはいても現実的には無力な形だけの教育理念と訣別して、日常の教室のひとコマひとコマで、子どもに有効に対応できる技術をひとつひとつ身につけたいという若い先生たちの願いに支えられている、といえよう。

しかしこの「運動」については、向山氏の有名な「跳び箱指導法」からいわゆる「追試」に至るまでの動向をみると、教師自身の教育観・人間観と教育技術の関係が深く問われることのない

ままに、個々の技術の法則化——集合化と言った方がいっそう適切である——が、子どもの動かし方を中心として、ひとり歩きをしている点に、私は深い危惧の念を禁じえない。根のない、見ばえのする技術がひとり歩きするのが恐ろしいのである。

とはいえ、この「運動」を地道に支え発展させていこうと努力されている人も少なくない。ここで取りあげる野口芳宏氏もその一人である。野口氏の『授業で鍛える』は、もちろん、実践の書、教育技術の書であるが、しかしそこには、氏の子どもにたいする深い信頼感と理解——しかも、これらが氏の哲学と深くむすびついている——が息づいている。氏のこうした基本的な人間理解を抜きにして、そこで展開される個々の技術を論じることは空虚である。「追試」の多くに見られるように、いいものはすぐさまマネをしてみようという軽薄な態度は許さない個性的で奥行のある実践がまぎれもなくそこにはある。印象的な事例をあげてみよう。

「不満の自覚」からの出発という項目を要約してみる。野口先生は一年生に「大きいかぶ」を一斉音読させる。「おじいさんがかぶのたねをまきました」一年生は大声で次のように読む。「おじいさんがかぶのたねをまきました」このあと野口先生は私たちに考えられないような評価を子どもに伝える。そして、この評価が子どもたちのその後の進歩の動力となるのである。先生はどのように言ったのだろうか。みなさんにぜひ考えていただきたい。（ちなみに私の全講義の受講生約三百名に、この氏の一言を予想させたところ、正解？はわずか二名であった。）